

2017 年 10 月 8 日（日）「毒麦の狭間で」

マタイ 13:24-30

24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。25 ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。26 麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。27 それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』28 主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』29 だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』」

マタイ 13:36-43

36 それから、イエスは群衆と別れて家に入られた。すると、弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。37 イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。38 畑はこの世界のことで、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。39 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。41 人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、御国から取り集めて、42 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。43 そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。

【序論】

マタイ 13 章は主イエスの譬話の宝庫です。52 節までに 7 つの譬話が収録されていますが、最初の 4 つは「種」と関係する話です（①種蒔きの譬 ②毒麦の譬 ③からし種の譬 ④パン種の譬）。これらは何らか「成長する物事」「命を秘めたもの」について語っている点で共通点があります。今日は第二の「毒麦の譬」です。何者かが畑に悪いものを蒔いていくという、内容的に見てあまり気持ちのよい話ではありません。主イエスがこの譬を通して聴衆に悟らせようとしていることは何でしょうか。

【本論】

本論 1. 毒麦の混入

今回も「種蒔きの譬」と同様、譬そのものと解説を並行して見てまいります。

- ・ イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。」(13:24-25)
- ・ イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。畑はこの世界のことで、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。」(13:37-38)

まず、この譬では「天の御国」(ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν) が「良い種を蒔く人」(ἄνθρωπος σπείροντι καλὸν σπέρμα) に例えられています(「種蒔きの譬」では「御国のことば」が「種」に例えられていた)。ここではどうも「人」に焦点が当てられているようです。人の子(主イエス)によって蒔かれる種とは「御国の子どもたち」(種も人!)。更に「畑」とは「この世界」と言われる。「この世界」が何を指すのかについては解釈が分かれます。世界全体のことが言われているのか、あるいは教会内の世界のことか。恐らく、第一には広い意味での世界全体のことが言われているでしょう。そして、その中に当然教会の営みが含まれてくる。主イエスは福音宣教のためにせつせと弟子を派遣されます。更に、弟子たちも種を蒔き、新たな弟子が誕生することを期待する。

ところが、「人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った」。39 節に「毒麦を蒔いた敵は悪魔であり」と説明があるように、悪魔がこの世界に何らか福音宣教の邪魔になるものを蒔いていく。「毒麦」(ζιζάνια) というものは、小麦と同族ではありますが、有害な植物で、穂が出るまでは小麦とほとんど区別がつかないそうです。そして、動物への毒性を持つ「^{ぼっかく}麦角アルカロイド」という物質が生産されるので、有害な植物として当時から認識されていました。人様の畑に「毒麦」を蒔くことは、当時のローマの法律で刑罰に該当する行為と見做されていました。『日本書記』にも「^{あまつみ}天津罪」と呼ばれるものの一つに「^{しきまき}頻播」(他の人が種を蒔いた所に重ねて種を蒔いて作物の生長を妨げること)という罪が出てくるようで、昔から農家さんがこのような嫌がらせで迷惑を被ってきたことを物語っています。



本論 2. 悪を根絶したくなる精神

さて、この「毒麦」が具体的に何を表すのか、検証してみましょう。38 節には「**悪い者の子どもたち**」と説明があります。41 節には「**つまずきを与える者**」「**不法を行う者**」ともある。恐らく、「似て非なるもの」という性質からして、異端的な教えと関係しているのでしょう。あるいは、一見キリスト者のように装っているが、教会の中に入り込んで分裂をもたらすような人。更には、「キリスト教とはこういう教えだ」と言って、偽りを宣べ伝える人のことが言われているのかも知れません。

麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』(13:26-28)

毒麦というのは、穂が出ると、通常の麦よりも髭が長く色も黒いため、見分けられるようになります。厄介なのは、その時まで分からないということ。異端もそれと似ていて、最初のうちは正統な信仰と幾つかの共通点があるために、なかなか見分けがつかない。そして、多くの人々が着いて行ってしまふことがあります。しかし、結果として教会に分裂をもたらし、後になって異端であったことに気づくというケースが少なくありません。

畑の管理をしていた「しもべたち」(弟子たち)は、毒麦が出てきたことに憤ります。彼らは管理不行き届きと見做される危険性もありました。ですが、畑の主人は言います。「敵の仕業だ」と。「しもべたち」のせいにはしません。そして、毒麦が出てくることは致し方ないことだと捉えているようです。このことが意味するのは、クリスチャンは異なる教えと共存するという事態を避けられないということです。毒麦は必ず生えてくる。悪しき者はどんな時にも神の民を、そして世界を惑わそうとして、悪い種を蒔き続けている。悔しいですが、その活動を止めることはできません。

しもべたちが「**では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか**」と息巻いている姿は印象的です。ここには、宗教的に純粹でありたい、分裂の火種となるようなものを一掃したいという思いがあるでしょう。当時のユダヤ教の中でも、熱心党と呼ばれるグループは、粛清の剣を振るって、イスラエルから不純分子を排除しようとしていました。エッセネ派の人々も、クムランの洞穴に隠れ住み、敬虔な信徒だけから成る共同体を形成しようとしていました。このような姿には、一種の「この世からの分離」という考え方があるように思えます。これが行き過ぎると、この世を離れて無人島で生きる道を選ぶことに繋がっていくでしょう。しかし、キリスト者はこの世で生きる存在であります。知恵をもって、この世に福音の種を蒔くべき存在として立てられているのです。

本論 3. 聖徒への慈しみ

- ・ だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。 (13:29-30)
- ・ 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。 (13:39-43)

この解説によりますと、「収穫」とは「この世の終わり」、「刈る人」とは「御使い」。世の終わりの審きの時に、御使いが「麦」と「毒麦」を分離する。だから、その時を待てと主は言われるのです。麦と毒麦は、成長するほど根っこのところで絡み合う。つまり、無理に毒麦を引き抜くと、麦も痛めてしまう、あるいは一緒に抜き取ってしまう危険性があるのです。主はそのことを案じて、毒麦はひとまずあるがままにしておけと言われました。ここには、主の「麦」に対する強い関心、思いやりがあります。一本たりとも誤って抜き取られてはならない。聖徒が一人でも御前からいなくなってしまうことがないように。

教会は時として、明確な根拠なく人を排除するという過ちを犯します。宗教改革の時に、改革者は異端視され、ローマカトリック教会から破門にされました。ウィクリフの墓は掘り起こされ、ヤン・フスは火刑に処せられました。しかし、毒麦だと思って排除したものがそうでない場合もある。いえ、かえって毒麦を排除したと信じて行動した自人自身が毒麦だったということもないとは言えません。その意味で私たちはまず自己吟味をしなくてはならないのです。排除は神が最終的になさること。問題を放置しておくことはできませんが、私たちがすべきことは、排除すること以上に、信仰に固く立つことなのです。聖書が真に語っていることは何であるかを学ばなくてはなりません。そうすれば、福音でないもの、偽りの言葉は嗅覚で嗅ぎ分けることができますようになります。その意味で、教理の学びは大切です。ある牧師が次のように言っておられたのを覚えています。悪いものに心を奪われないためには、悪いものを排除することにエネルギーを使うよりも、聖なるものにしっかりと目を向け、聖霊に満たされなさいと。

審きは神のものでありますから、私たちはお委ねすればよいのです。「火」は最後の

審判との関わりでしばしば言及されます（黙示録 19:20、20:14）。神はすべてをご存知であり、終わりの日にはすべての善と悪が判別される。その時、福音に逆らって生きた者たちは「泣いて歯ざしりする」、つまり、強い後悔をもって泣きじゃくる。反対に、「正しい者たち」、即ち、福音を信じ、福音に生きた者たちは、「父の御国で太陽のように輝く」というのです。「父の御国」という表現は、天国が父なる神様の愛で支配されていることをよく言い表しているでしょう。

【展開】

今日の「毒麦の譬」とよく似た譬話が 13:47-50 に出てきます。「地引網の譬」と呼ばれるもので、やはり良いものも悪いものも一緒くたに神の許に引き揚げられる。しかし、最終的には神の御心に適うものとそうでないものとは分離されるということが教えられています。今日の「毒麦の譬」は「御心に適うもの」の方に焦点が当てられているのに対し、「地引網の譬」は「御心に適わないもの」の方に焦点が当てられています。今日のポイントは、神がご自身に属するものを如何に大切に思ってお下さっているかという点にあるでしょう。

【結論】

私たちは多くの異なる教えや異端の狭間で生きています。これは地上の教会が避けて通れないことです。しかし、それらを排除することに躍起になるのではなく、自分自身が福音に生きているかどうかを吟味し、忍耐強く福音の種を蒔き続けることが私たちに与えられている使命ではないでしょうか。最終的な審きは、すべてをご存知であられる神にお委ねして歩んでいけばよいのです。神が一人一人の聖徒を慈しみ、一人も欠けることなく御国に入りたいと願っておられることを心に留めて歩んでまいりましょう。

【祈り】

ご自身に属するものを知っておられる神よ。私たちはあなたに属しているのでしょうか。人を裁きながら、自らが審かれるべき存在となっていないのでしょうか。私たちが目を向けるところが、聖なる神ご自身であり、福音そのものであることを覚えます。まずは自分の信仰が揺るぎないものとされることを求めます。最終的な権限をあなたにお委ねし、福音に生きる者となることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

沈黙のうちに、すべての善悪を判断しておられる、父なる神の愛。

ご自身の民を愛するがゆえに、毒麦をもそのままに、審きの日を待ち給う、主イエスキリストの恵み。

常にキリストの栄光を仰ぎ見、脇目も振らず福音に生きる道を歩ませ給う、聖霊の親しき交わり、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。